

闘う技能と自己防衛：女子プロレスラーの身体とジェンダー 会場敬子

1. はじめに

ジェンダーがどのように身体化されているかについての考察が、90年代以降、ジェンダー研究の中で広がりを持ってきた。身体化されたジェンダーについては、身体的実践によって形成される特定の女性身体をめぐる研究がある (Bartky, 1990; 浅野, 1995, 1996)。一方で、身体化されたジェンダーは、実は、身体的実践によって維持されるだけでなく、変容されることも、スポーツとジェンダー研究の領域で明らかになってきた (Dworkin, 2003; Heywood, 1998; Markula, 1995)。

本稿では、身体化されたジェンダーの多様な側面の中でも、特に、女性の「身体的受動性」に焦点を当てる。これは他人に対して穏やかに接し、相手を不快にせず、自分の身体に対する侵害に対して受け身であることを意味する。この結果として、女性は自分の身体に対する暴力に対抗できなくなってしまう。この身体的受動性は、男性には求められず、女性にもつばら要請されているので、身体化された規範的な女らしさと捉えることができる。本稿では、第一に、この身体化された規範的な女らしさが、身体的実践によって変容する可能性を、自己防衛訓練¹を学ぶ女性たちに関する研究 (e.g., McCaughey(1997))を通じて検討する。次に、身体的受動性を女性たちがどのように身体化したのかについて、社会化とスポーツ、特に闘争的スポーツの影響を検討する。その結果、闘争的スポーツやそれに類似した活動に参加する女性は、男性からの暴力に対抗するようになる可能性が予測される。この可能性を考察する対象として、女子プロレスラーに焦点を当てる。なぜなら、女子プロレスラーはプロレスの「闘い」を通じて、「闘う技能」(自分の身体に対する男性による暴力へ対抗するための身体的技能)を獲得しているからである。ちなみに、本稿で想定している暴力は、男性による女性に対する暴力である。この闘う技能を、女子プロレスラーたちが日常生活で遭遇する暴力に対して、応用しているか否かを分析することで、彼女たちが、身体化された規範的な女らしさとしての、自らの身体的受動性を変容させる可能性を考察する。

2. 身体的実践による身体化されたジェンダーの変容

アメリカでの自己防衛訓練の参加者に関する先行研究では、身体的実践によって、身体化された規範的な女らしさを変容させることができるか否かが考察されてきた。

McCaughey(1997)は、男性の暴力に対抗するために、自己防衛の重要性を強調する。自己防衛を学んだ女性たちは、自分自身を閉じ込めるような女らしさのある種の身体的振る舞

いを捨てることによって、男性の性的な対象物としてのあり方 (McCaughey, 1997) を拒否し始める。さらに、McCaughey は、「自己防衛者になることは、ジェンダーを超越することである」(1997, p. 128) と主張する。なぜなら、自己防衛訓練の中で、女らしく振る舞うことをやめ、攻撃してきた相手に対しては、つらく当たることを学ぶからであると主張する。McCaughey(1997) がここで示唆している「女らしさ」は、Cline and Spender(1987) が指摘した、他者の欲求に配慮すること、他者に対して感じ良く対応することと、それが生み出す受動性と解釈できる。自分の気持ちや意思よりも、他者の欲求に配慮することで、女性は自分の要求をはっきりと伝えることができづらくなり、自分の身体に対する侵害に対して受け身になっていく。本稿では、身体化されたこの傾向を身体的受動性と呼ぶ。さらに、この傾向は女性にもっぱら要請されているので、この身体的受動性は身体化された規範的な女らしさであると言える。自己防衛を学ぶことは、他者からの働きかけに対して受動的であることを打ち破り、自己主張をすることを促し、限定的に相手に対して攻撃をもするので、身体的受動性のような、身体化された規範的な女らしさを超越する行為だとみなすことができる。

しかし、自己防衛を学ぶことと規範的な女らしさとしての身体的受動性との間に対立を感じている女性たちがいることが、McCaughey(1997) の研究対象者の中に見出される。一方、De Welde(2003) が研究した自己防衛訓練に参加した女性たちは、自分の身を守れることと女性であることを、再定義した「女らしさ」に統合させ、対立したものは捉えていなかった。したがって、McCaughey の主張「自己防衛者になることは、ジェンダーを超越することである」(1997, p. 128) は、限定的なものに留まっており、より詳細な分析が必要である。

3. 女性が暴力に対抗できないメカニズム

自己防衛の訓練によって、女性が自らの身体的受動性を変容する可能性が示唆されているが、そもそも身体的受動性を、どのように女性たちは身体化したのだろうか。さらに、なぜ多くの女性が男性の暴力を恐れ、それに対抗できないのだろうか。この節では、これらの点を、主にスポーツとジェンダー研究や女性に対する暴力研究の知見から説明し、先行研究から導きだされる疑問を明確にする。

3.1. 女性というジェンダーの社会化と身体

第一のメカニズムは、男女の身体が社会化される過程で、男性は自分の身体を積極的に使い、世界と関わるようにしていくのに対し、女性は自分の身体を積極的に使わず、小さな空間に閉じ込められるようになっていくことに始まる。

Young は、少年が特定の身体的技能を発達させることを奨励されているのに対して、「少女や女性は、この世界との自由で開かれた関わりにおいて、十分に身体的な能力を使う機

会を与えられていない」(1980/2005, p. 43) と述べている。70 年代後半の観察に基づいた Young(1980/2005) のこの指摘は、今日も当てはまると Therberge(2003) が指摘している。最近の少年や少女のスポーツ経験に関する文献を検討したところ、男の子たちは、自分達の身体を活発に試し、使うことに自信と意欲をもっているが、女の子たちは、自分たちの身体を使う空間を最小限にし、男の子たちが身体的に優位であるという見方を受け入れている (Therberge, 2003)。

Young(1980/2005) は、また、女の子が自分の身体を主体として認識し、自分の身体の空間的な、かつ側面的な潜在能力を充分に使っていないことを指摘している。この理由として、社会化の過程で、親や就学前の幼稚園や保育園の先生が、子供の身体をジェンダー化しているからであると Martin(1998) は説明する。就学前の幼稚園や保育園で、女の子が大きな声を出すことを、先生が制限することを通じて、女の子たちが飛んだり、ふざけたりすることも制限する。その結果、女の子たちは、あまり激しすぎる遊びはしてはいけないこと、自分たちの身体は、静かに、小さく、物理的に窮屈であることになっていることを学ぶ (Martin, 1998)。

特に興味深いのは、女の子が他の子供に意地悪をされたり、いじめられたりしたときに、直接的な表現で大きな声を出して抵抗することを、先生は規制していることである。例えば「やめて」と大きな声で言うのではなく、「やめてちょうだい」ともっと柔らかな声で言わせている (Martin, 1998)。つまり、女の子には、すでにこの段階で、女らしい振る舞いは、自己主張をすること (assertive) ではないことであると教えられている。なぜなら、女性には、Cline and Spender(1987) が指摘したような、他者の欲求に配慮すること、男性には求められない感じの良さが要請されるからである。

3.2. 近代スポーツと男性の攻撃性

第二のメカニズムは、「ジェンダー化した制度」(Messner, 1992, p. 16) としての近代スポーツが、個々の男女の身体の構築に影響を与えていることである。特に、男性の攻撃性の奨励、女性の攻撃性からの排除は、近代スポーツを通じて身体化されている。

近代スポーツは、競技を通じて男性性を構築する、男性のための領域として発展してきた (来田, 2004)。市民社会の成立以降、公私の領域の分離と、男性が公的な領域を独占し、女性を私的な領域に閉じ込めたことによって、男性は自らの権力と特権の基礎を確立した (Hartmann, 1976)。しかし、多くの男性は、家父長的特権の基礎であった商売や農地の所有権を次第に失い、賃労働者となっていった (Tolson, 1977)。このような男性のプロレタリアート化、都市化、近代化、(特に合衆国においては) 西部辺境の消滅が、家父長的な男性性の形態を弱めていった (Messner, 1990)。また、特に 20 世紀初頭のフェミニズム運動が、男性の優位性への脅威となっていった (Kimmel, 1987)。

この「男性性の危機」(Kimmel, 1987, p. 262) と呼べる状況下において、組織スポーツは「主要な男性性を確認する経験」(Dubbert, 1979, p. 164) として重要性が増していった。スポーツは、「男性によって構築された、男性間の同質的な (homosocial) 文化領域となり [...] 女性に対する男性の「自然な優位性」の劇的で象徴的な証明を供給」(Messner, 1988, p. 200) することになった。

例えば、Dunnig(1986) によると、イギリスでは、産業化や近代化にともなって、社会生活が「文明化」し、暴力の使用への統制が制度化され、その結果として、男女間の力の均衡が女性の方に移動していった。男性たちはこれを脅威と感じ、自分たちの女性に対する優位性を示すために、ラグビーなどの「格闘技」を設けていった。つまり、近代スポーツは「19世紀後半から20世紀の初頭において、主に、ジェンダー関係の危機への男性からの反応として構築された」「ジェンダー化した制度」(Messner, 1992, p. 16) なのだ。

さらに、現代においても、スポーツは、「男性や男性性と、高く価値付けられた技能及び攻撃/力/暴力の制限された使用とを結びつける」(Bryson, 1987, p. 349) ことで男性の優位性を構築している。その根拠の一つとして、アメリカン・フットボールでは、巨大な筋肉を持ち、力を攻撃的に使う、防護服をつけた男性身体が、身体における男性の優位性を示すのに対して、女性は、脆弱な身体を持ったチアリーダーとして、男性たちの脇で彼らを応援する性的な対象になっていることが挙げられる (Messner, 1990)。つまり、スポーツにおける攻撃性や暴力は、男性の女性に対する優位性を構築することに役立っている。

3.3. 近代スポーツと女性性

それでは、近代スポーツは女性の身体をどのように構築してきたのだろうか。そもそも、女性が男性と対等な立場でスポーツへ参加することは困難だった (来田, 2004)。なぜなら、19世紀を通じ、女性の身体的劣位性を正当化する「性差の科学」が蓄積されていったからである (来田, 2004)。また、勝敗を競うようなスポーツを行うことに対しては、20世紀に入ってから、女性には奨励されてこなかった (来田, 2004)。

特に近代スポーツの中でも、自分の身体を使って、相手の身体に対して攻撃する要素がある闘争的スポーツ²は、日本において、女性には依然奨励されていない。例えば、就学期の子供たちにとって重要なスポーツ経験の場となっている部活動では、参加種目におけるジェンダー差が認められる。1999年度の全国高等学校体育連盟専門部男女別加盟人数において、ジェンダー差が大きく、女子の参加がすくない種目は陸上競技と柔道であった (井谷, 2001)。また1997年に全国高等学校体育連盟には男性だけの加盟が7種目あり、その中には、ラグビー、ボクシングなどの闘争的スポーツが含まれている (井谷, 2001)。

女性が身体接触を経験することや、攻撃性を発露することから排除されている結果として、闘争的スポーツを経験しない多くの女性たちは、他人の身体への接触への慣れや、攻撃や防御の技能を身につけられず、暴力を振るわれた時に、対抗する手段や意識を発達させることができなくなると推察される。さらに、近代スポーツを通じて男性の身体的優位性が強調、流布されるため、女性たちも男性の身体的優位性を受容するようになる。そのため、このイデオロギーの受容が、女性が男性から身体的暴力を振るわれたときに、男性にはかなわないという意識につながると推測される。

自分の身体的力を発達させなかった多くの女性たちは、身体的優位性をもった男性から性的な暴力を受けるかもしれないという恐れを抱くようになり、用心深く、慎み深い態度をとるようになる (McCaughey, 1997)。また行動面では、男性からの暴力の恐れが、女性自身に自由に移動することを制限させるようになる。男性からの暴力を避けようとすると、深夜や人気のないところを、一人で移動することを女性自身が抑制する。これは逆に、男性からの暴力の恐怖が女性の行動を制限し、「女らしく」行動することを要請する、ある種の社会的統制であるといえる (Reynolds, 1974)。

本節の先行研究の検討から導きだされる疑問は二つある。一つは、闘争的スポーツに女性が参加すると、それに参加している一部の男性と同じように、彼女たちは攻撃的あるいは暴力的になるのかという疑問である。もう一つは、闘争的スポーツの経験は、女性たちにどのような影響を与えるかという問いである。特に、男性からの暴力に対抗するようになるのか否かという疑問である。第一の疑問は別稿に譲り、本稿では第二の疑問について考察してゆく。

4. 女子プロレスラーと闘う技能

闘争的スポーツやそれに類似した活動に参加する女性で、自己防衛訓練を受けている女性たちのように、身体的受動性を打破している女性たちはいるだろうか。本稿では、闘争的スポーツに参加している女性たちではなく、それに類似した活動に参加している女子プロレスラーに焦点を当てる。

その第一の理由は、女子プロレスラーがプロレスの「闘い」で獲得する技能が、他の多くの闘争的スポーツで獲得できるそれよりも、強力であるからである。まずプロレスの攻撃の技には、投げ技、絞め技、関節技、蹴り技、打撃など、ありとあらゆる技が、レスラーの生命に危険でない限り原則的に許容される。一方、例えばプロレスに似ているように見えるアマチュア・レスリングにおいては、打撃、絞め技、ギブアップを奪うための関節技は禁止されている (日本レスリング協会, n.d.)。

彼女たちはさらに、闘いの中で、このような多種多様な技を受けなければならない。自己防衛や闘争的スポーツと異なり、プロレスは相手の技を受けることで成立している(亀井, 2000)。例えば闘争的スポーツの中のボクシングでは、とにかく相手の攻撃を避けて、短時間で相手を倒すことに主眼が置かれているが、プロレスは相手の技を受けなければ、相手に自分の技を受けてもらえない。

相手の技を受けるために、女子プロレスラーは受け身の技を習得するが、それが失敗すると大きな怪我につながったりする場合がある。³つまり、彼女たちは、それほど大きな破壊力を持った多種多様な技を掛けたり、受けたりしているのだ。これが、プロレスの「闘い」を構成しているのである。したがって、そこでの身体の鍛錬とそのような技の習得は、自己防衛をしようとする女性たちが直面するような、男性による暴力に対抗するための闘いに応用することが可能であると考えられる。つまり女子プロレスラーたちは、自分の身体に対する男性による暴力へ対抗するための身体的技能、すなわち闘う技能を、プロレスでのこのような闘いを通じて獲得していると考えられる。

女子プロレスラーに注目する第二の理由は、彼女たちを、闘う技能を生み出す身体の鍛錬や身体的能力の側面からだけでなく、芸能者としての側面からも考察することができるからである。プロレスは相手の技を充分受けた上で、それにもかかわらず最終的に相手を倒すことができるという、レスラーの身体力や精神力を観客に示している。加えて、個性豊かな衣装やパフォーマンスも組み入れながら観客を楽しませることが女子プロレスラーの最終目的なので、芸能者としての側面(亀井, 2000)もが求められている。このようにプロレスは、勝敗が最終目的の競技スポーツとは異なるので、女子プロレスラーたちは闘争的スポーツに類似した活動を行っている人々といえることができる。

5. 研究の目的及び方法

本稿では、女子プロレスラーたちが、身体化された規範的な女らしさとしての、自らの身体的受動性を変容させる可能性を、彼女たちが男性による暴力に対して、闘う技能を応用しているか否かを通じて考察する。

先に検討したように、多くの一般女性は、男性からの暴力に対して対抗する心理的、身体的力を持っておらず、男性からの暴力に対して無力になっている。そこで闘う技能を持つ女子プロレスラーたちが、自分に対する暴力に対してどのように対処しているかを考察することによって、本稿は、どうすれば多くの女性たちが男性からの暴力に対抗できるかについての可能性を見出すことに貢献できると考える。

闘う技能の実際と、女子プロレスラーたちが、闘う技能をどのように捉えているかを知るために、彼女たちへのインタビューとプロレス興行の観察を行った。補足的に、プロレス雑誌や現役または引退した女子プロレスラーが出版した自伝を読み、インタビューに反映させた(例えば、(神取, 1997)、(長与, 1989)など)。またインタビューの一部の質問を、Lowe(1998)の質問票を参考に作成した。

2004年の春から2005年の秋までの間に、25名(うち引退者3名)の女子プロレスラーの詳細な半構造化インタビュー(質問内容はあらかじめ決まっているが、対象者の話の展開を尊重し、その話の流れに沿って、質問の順番を変えるインタビュー方法)を行った。対象者は、団体関係者などを通じて snow ball sampling(「機縁法」とも呼ばれる、人的ネットワークを利用したサンプリング方法(桜井, 2002))によって増やしていった。対象者の収集と分析は、質的データから理論を生み出す方法としての、grounded-theory approach を手引きとした(Glazer & Strauss, 1967)。

インタビューは、一人あたり2時間から3時間に及んだ。インタビューは、プロレス団体に入団する以前から現在までの人生において、身体の変化やプロレスの経験について質問した。⁴分析において、多くの質問に対する女子プロレスラーの語りを使っているが、特に本稿に関係する質問は以下のものである。(1)レスラーになった後で、日常生活で、男性から身体について何か言われたり、何かされたりしたことはありますか？(2)女性からはどうですか？(3)レスラーになった後、日常生活での行動や服装の変化はありますか？(3-1)例えば、夜道が怖くなくなりましたか？(3-2)例えば、男性の痴漢を撃退したことはありますか？(3-3)例えば、男性からいやがらせや暴力を受けている人を助けたことはありますか？⁵

インタビュー内容は録音し、専門家にテープ起こしを依頼し、録音内容とテープから起こされた文書データとの一致を筆者が確認した。データ収集過程で、筆者以外が行ったのは、テープ起こしのみである。

インタビューした当時現役だった女子プロレスラーのキャリアは、10年以上が6人、6年以上9年以下が10人、そして1年以上5年以下が6人となっている。彼女たちの年齢は20代が最も多く17人で、30代は5人であった。尚、以下登場する女子プロレスラーの名前はすべて仮名である。以下女子プロレスラーを、紙面の関係から、特別な場合以外、レスラーと略す。

6. 研究結果

6.1. 闘う技能を活用しているレスラー

葉山理恵は、レスラーになってから、痴漢などに何かされたら、「倍返し」をしている。レスラーなので、こちらから手は絶対に出さないけれど、逃げようとしたら絶対に捕まえる。ある時、身体の正面から痴漢に襲われた。すぐさま痴漢の襟をつかんだら、たまたま相手が転んでしまった。「面倒くさいんで、そのままズルズル、ズルズル引きずって。へへ。(笑い)。殺す気かーってゆうから、・・・ああ、死ねよーとか言いながら」警察署まで引きずって行った。そしたら、「警察署の人がこんな夜中に女の子が荷物引きずってるんだらうと思ったら人（ひと）とか言われ」た。

電車の中でも痴漢によく遭うが、プロレス技を応用して効果的に撃退している。後ろからお尻を触る痴漢には、背伸びしたふりをして、自分の頭を相手の顎に打ちつける。

要はチンクラッシャーですよ。技、なんですけど。こう手（てえ）つかんだりとか。痴漢で一すってというのが駄目なんです。面倒くさいんですよ。それなら一発入れてしまえって言う。(中略) こう、コンって背伸びすると大抵の人はあごがここ（頭の上を指さす）にあるんですよ。くっついているとき。ははは（笑い）。

これで痴漢はすぐに静かになるという。

すごく混んでいるときは、横から触ってくる痴漢がいるので、頭突きは使えない。その時は、指先をぎゅっと握る。「やっぱり握力も 40 以上とかあるんで、痛いみたいです。」

また、痴漢に遭っている他人を助けてあげたことは多い。女子プロレスラーは足が速いので、短距離だと、一般の人を必ず捕まえることができる。「その人痴漢です」とだれかが叫ぶの聞くと、「手柄いたadaki」と思ってしまう。痴漢を捕まえて何回か感謝されている。一般の人は痴漢が「やっぱり怖いみたい」である。電車の中で、痴漢がだれかを触っているのに気づくと、すぐ捕まえて、警察に突き出す。以前住んでいた JR の路線は、乗るたびに痴漢がいた。自分が痴漢に遭ったり、他の人が痴漢に遭っているのを目撃した。葉山によると、痴漢を怖がる必要はないという。なぜなら、痴漢は大抵刃物を持っておらず、素手で勝負できるので、痴漢に負けることはまずないからという。

彼女は、自分の身体的な強さや闘う技能を、日常生活で降りかかってくる暴力に対抗するために使っている。自分は一般人よりも力が強いことを意識しながら、痴漢を効果的に撃退している。さらに、自分に対する暴力だけではなく、他の女性に対する暴力に対しても、自分が得た身体的力や闘う技能を使って助けている。

痴漢に遭っている他人を助けた経験を持つレスラーに、倉田みどりとし川昭子がいる。倉田が 18 歳で、まだ新人のころ、電車と一緒に乗っていた知り合いの女の子のお尻を傘でさわっていた「おじさん」がいた。自分の知り合いに謝るようにその「おじさん」にずーっと言っていたが、その痴漢男は、電車が駅に止まると、謝らずに、「ばあーって」降りてしまったという。

市川昭子も、倉田と同じように闘う技能は使っていない。彼女は電車の中で、他の人が痴漢に遭っているところを見たりすることが多い。そのときは、「そうっと（痴漢に遭っている女の人に）近寄ってって電車、車両変えたほうがいいですよつかゆっちゃうほう」だと語る。痴漢だと確信できても、怖くて何もできずに我慢してしまう女性もいる。市川はそんな女性を心理的に支えてあげることが多いという。そして、このような行動がとれるようになったのは、レスラーになってからだと言っている。

ただ、ここで市川がとっている行動は、痴漢を撃退することではない。あくまで、痴漢に遭っている女性を支えてあげることである。痴漢を捕まえることに協力するのではなく、「車両を変えることをすすめる」に留まっている。痴漢に対峙するのではなく、痴漢から逃げることを助けている。市川は、自分の持っている体力や闘う技能を、痴漢を捕まえることに活かそうとしていない。それは、プロレスは「人に危害を加えるためのスポーツじゃないので」という市川の発言から伺い知ることができる。これはプロレスの闘いが、相手を倒すことを最終的な目的にはしているが、相手を傷つけたりすることを目的にはしていないことに由来する。市川は、日常生活で遭遇する暴力に対抗することを、「人に危害を加える」と認識しているので、プロレスが「人に危害を加える」ものではない以上、プロレスの闘う技能を日常生活で遭遇する暴力への対抗に応用するという考えに結びつけられないでいる。また、暴力に対抗することを、「人に危害を加える」と認識しているということは、自己防衛の正当性—先制された暴力に対しては、自分が危害を加えられないために、闘う権利があること (McCaughey, 1997)—を市川が認識していないと解釈できる。したがって、この理由からも、市川は闘う技能を日常生活に応用することに考えが及ばなくなっている。

6.2. 闘う技能を活用したことがないレスラー

闘う技能を活用したことがないレスラーの中で、少数のレスラーが、襲ってくる相手への恐怖 ((1) 怖くて何もできなかった、に該当) や自分の闘う技能への恐怖 ((2) 殴れといわれても、殴れない、に該当) を語っていた。一方でそれ以外の多数のレスラーは、二つのグループに分けられる。一つは、暴力に実際遭遇したことはないが、自分は男に見られているから襲われないと語るグループ ((3) 男に見られているので誰も襲ってこない、に該当) と、もう一つは、暴力に遭遇した場合の自分の対応を語ったグループ ((4) 冷静になれば大丈夫、に該当) である。

(1) 怖くて何もできなかった

暴力に遭遇して、それに対抗できなかった体験を唯一語ったのは、泉早苗だった。彼女はレスラーになってから痴漢に遭ったり、それを撃退したことはないが、レスラーになる前はよく痴漢に遭っていた。最もひどい痴漢に遭ったのが、格闘技道場に通っていた高校生のころだった。この体験はレスラーになってからのものではないが、泉がプロレスに非常に近い格闘技をやっていたので、闘う技能を身に付けていた状態と解釈できる。また、レスラーになった現在も夜道は怖いと答えているので、日常生活で遭遇する暴力への対応はその頃と同じだと推察できる。したがって、泉のこの体験を分析対象に加えた。

格闘技の道場に練習に行くために歩いていたら、途中でスクーターに乗った人に追いかけられた。そして、「スクーターから、がっつ、こう、つかまれたことがある。」その時に警察を呼んだら、どこに行くつもりだったのと聞かれたので、

格闘技の道場って言ったら、警察の人に、格闘技の道場通ってるぐらいなんだから、やっつけちゃえばよかったですよ。なんのためにやってんのよとかっすぞい言われて。はい。実際もう、怖くて。できませんね、そういうときって。えへへ(笑い)。(中略)あの、ぶっ飛ばしてやればよかったです、後(あと)になって思うんですけど、そのときはなんにもとっさにはできないですね。

たとえ格闘技をやっている、襲ってくる相手への恐怖で、何もできないことが、泉の話から明らかになっている。このように格闘技の経験は、自動的に自己防衛の能力に結びつかないことが明らかになっている。

(2) 殴れといわれても、殴れない

対照的に、相手にではなく、自分の闘う技能への恐れを語ったレスラーが、名取涼子と北山佐和子だ。北山は、日常生活で殴られても殴り返さなかった体験を語った。仲の良い友達同士で飲んでた時に、男友達に悩みがあって、相談を受けていた。そうしたら、自分が言ったことにカチンときたのか、その彼にはたかれた。彼は実は北山に殴ってほしかったようだが、自分は殴られてもその男友達を殴り返さなかった。すると、相手は張り手をして北山を何回もはたきとばす。ついに北山は、しつこく殴る相手の胸ぐらをつかんで、相手を壁にガンと押しつけて、「プロだから殴れない。なんかあった場合、仲良くてもなんかあった場合困るから、殴れないよ。殴ってっつゆわかれても、私は殴れない。もう、ほんとにいい加減にしてっつ」言った。一般の人に殴られても殴り返してはいけないということはプロレス団体で教わらなかったが、自分で自覚したと語る。このように、例えだれかに暴力を受けても、自分の持つ闘う技能が相手にとって破壊的だと自覚していると、その技能を封印してしまう。だから、日常生活で

遭遇する暴力に対抗する力を自分が持っているのか否かについて、その能力を確認することが難しくなっている。

このように襲ってくる相手や自分の闘う技能への恐怖を語るレスラーは、比較的少数であった。闘う技能を日常生活で実践した経験がないレスラーの多くは、以下の二つのグループに分けられる。

(3) 男に見られているので誰も襲ってこない

一つ目のグループは、自分たちは、日常生活で、女ではなく男に見られているので、暴力の対象にならないと語っている。そもそも日常生活で、男に間違えられる女子プロレスラーは多い。彼女たちに共通しているのは、髪が短いことと、パンツやジーンズをはいていること、さらに体格がよい(筋肉や脂肪が身体につき、身体に厚みがある)ことである。三原幸は、夜道は怖くないと言い切る。なぜなら、「自分はもう見た目がこんだから、・・・歩いて、誰も襲ってくる人なんかいない」と思う。インタビュー時の彼女の「見た目」は、背が高く、肩幅も広く堂々たる体格だった。髪の毛は短く、金色に染め、白っぽいパンツをはいていた。彼女の外見も、髪が短く、パンツをはいているという、男に間違えられる女子プロレスラーの要素を満たしていた。三原は、自分がまず男に見られ、それに、お金も持ってなさそうなので、物取りも襲ってこないと考えている。つまり、男に間違えられると攻撃の対象にならないと考えることは、女性=弱い=攻撃の対象という方程式が、彼女たちの頭にあるということである。

(4) 冷静になれば大丈夫

二つ目のグループは、夜道で襲われたりしたことはないが、程度の差はあるものの、暴力に対抗できると思っている。最も自信の程度が弱いのが里中亜希である。彼女は、最近ナイフを持っている人がいるので、夜道は怖いと語る。しかし、相手がナイフを持っていなかったら、「多少は大丈夫かもしれない」と言う。

里中よりも自信があるレスラーの中で、レスラーになってから暴力への対抗に自信が弱まったレスラーと強まったレスラーがいる。前者は桑名真希である。入団前は、怖いもの知らずだった。誰か襲ってきたら闘って、新聞にでも載ってやるぐらいの勢いだった。その頃は自分の身体的な力に自信があり、男性との身体的な力の差も感じていなかったが、プロレス界に入ったら自分より強い人も沢山いることがわかった。

桑名の場合、男子プロレスラーもいる団体にいたので、女子プロレスラー間の体力差だけでなく、男子プロレスラーとの力の違いを感じるがあったと推察される。そのため、男女の体力差を認めるようになった。「ちょっと柔道ぐらいやってた一、男の人が来たら一、やっば、勝てなかったりするっていうのあるんですよ、やっば。持って生まれた男と女の違いだから」と語る。格闘技経験がある男性には、勝てないと思っている。また、プロレスの技を知つ

ていても、それがすぐに夜道の闘いに応用できるとも思えない。相手が刃物やピストルを持っていたらどうにもならないと思う。しかし、本当に危なかったら、闘うと思うと語る。

桑名の自信を弱めているもう一つの要素は、先輩男子プロレスラーによる言説である。そのレスラーから、女子プロレスラーは「私は強いな一って思ってる」が、それが危険だと言われた。「冷静になんかすれば大丈夫かな」と語っているように、彼女は男性との力の差を認識しているといっても、自分を弱いとは思っていない。しかし、男子プロレスラーに、女性だからやっぱり男性には勝てないと言われると、そうかなと思ひ、自己防衛の時の自信を弱めている。

一方、プロレスの経験により、暴力への対抗に自信を強めたレスラーが、桜井真澄、小田切麻帆、飛石さやかである。桜井真澄は、夜道で不意打ちをされたら、「びっくりして、多分、あーってなると思」う。怖くて闘えなくなってしまうと思う。だから、「暗いとことかちよっとはや歩きとか」する。しかし、落ち着いて、試合のように相手と対峙して闘うのなら、「前よりは自信はある」と語る。また、レスラーになる前は痴漢が怖かったが、現在は「お化けとかは怖いですけど、痴漢が（怖い）とかは思わない」と小田切は言う。また痴漢ではないが、喧嘩をふっかけられても女には絶対に負けないし、男でも一般人だったら「多少は負けないと思」う。なぜなら、「力はないですけど、こっちはやっぱり、技、技っていうか。関節の入り方とか（笑い）、すかし方とか分かる」からである。

飛石さやかは、夜道でだれかが襲ってきたら、刃物をもっているかもしれないと考え、「怖いと思」うし、「うわ一ってすくむかもと思」う。⁶しかし、いざ闘いを仕掛けられると多分闘うと思。それは、海外での仕事の経験からそう思う。

一度、海外のお笑い番組に出たときに、お笑い芸人とスパーリング（実践練習）をしてといわれた。お笑い番組なので、軽い感じでやるのかなと思っていたら、相手が「突然バツて押さえ込もうとした」。その瞬間「こんな素人に負けてたまるかと思って、急にカーッと来て、それでもう、すごい押さえ込んで投げつけちゃった」という。その時は手を骨折していて、ギブスをはめていたのに、力が出た。この経験から、咄嗟の時は力がでたので、「あっ、大丈夫、大丈夫と思って（笑い）。男でもいけるかもしれないと思」つた。相手が接近してくると怖いと思ってしまうが、例えば自分の肩を触るだけではなく、ぎゅっと捕まえられたら、「やり返します、絶対」ときっぱりと語る。これは、闘う技能が身体化され、プロレスと擬似的な状況になると、身体がプロレスでの動きを始めることを示している。そして、日常生活で遭遇する暴力を身体が受けた時にも、身体が同じような反応をすることが予想できる。

7. 考察：プロレスの闘いの特殊性と自己防衛

前節での研究結果から、次のような疑問が生じる。なぜ闘う技能を実際に自己防衛に応用しているレスラーが非常に少ないのか。しかし、なぜ自分に襲いかかってくる相手に対する恐怖心を語ったレスラーも非常に少ないのか。また、多くのレスラーは、闘う技能を自己防衛に応用はしていないが、襲われて何の抵抗もできないのではなく、むしろ闘うと自信を持っているのはなぜか。これらの疑問について考察する。技を受けることが、闘争的スポーツとは異なる、プロレスの大きな特徴であるので（亀井, 2000）、以下、闘う技能を、「攻撃する技能」（技を掛ける技能）と「受け身の技能」（技を受ける技能）とに分けて考察する。

7.1. 攻撃する技能と自己防衛

プロレスで習得した相手を攻撃する技能を、実際に自己防衛に応用しているレスラーは非常に少なかった。それは、プロレスでは受け身ができる人に対してしか技を掛けないため、日常生活で暴力をしかけてくる人間であっても、プロレスの受け身はできない人であるとみなされるので、攻撃をしかける対象になりにくいことがある。さらに、北山が語っていたように、レスラーになった自分の力に自分自身が恐れを持っているので、その力を使って、日常生活で暴力をしかけてくる人間に対して攻撃することが、レスラー自身によって非常に抑制されているからである。しかし、攻撃の技能を使うことが抑制されていると、レスラー自身、自分の力が強いのか否かを実感できる機会が無いままになってしまう。そのため桑名のように、レスラーになる前に自分の身体に対して持っていた自信が、男子プロレスラーたちの言説によって弱められてしまい、それを否定する経験を持たないままになっている。女子プロレスラーたちはプロレスで身につけた攻撃する技能を、直接的に自己防衛に応用することを阻まれている。

また、自分に降りかかってくる暴力に対抗することができるという自覚がないと、泉のように、例え格闘技の経験があっても、それを暴力に対抗することに応用できないままになってしまう。また市川のように、自分に降りかかってくる暴力に対抗することの正当性、つまり自己防衛の正当性を認識していないと、闘う技能を日常生活に応用することに考えが及ばなくなる。

にもかかわらず、葉山理恵はなぜ攻撃する技能を、日常生活で遭遇する暴力に対抗するために使うようになったのか。葉山がプロレス会場でお客から身体を触られた時、それをたまたま先輩レスラーの亜佳里（あかり）が目にして、葉山は亜佳里にこう言われている。

ああいうときは、気づかれぬ程度にやっついていいからって、言われました。けがさせなければ大丈夫だからって、そうしないとまたやられるよって言われたことがあって。自分の身は自分で守らなきゃって。

つまり、プロレス会場で、自分たちの身体を単なる性的な対象として卑しめるような男性客には、身体的な力で怪我をさせない程度に報復してよいということが、女子プロレスラーたちの間に許容されていると考えられる。葉山はプロレス会場で、身体を触るような男性客に対抗するうちに、それを会場外で遭遇する痴漢にも、衝撃が少ない技を使って対抗するようになっていったのではないかと推測される。

7.2. 受け身の技能と自己防衛

それでは、受け身の技能は自己防衛の能力に生かされているだろうか。プロレスでは相手の技を受けることが当たり前のことになっているが、日常生活で遭遇する攻撃をプロレスの攻撃のように受けると、身体に損害を被る。したがってこの場合は、攻撃を受けるのではなく、避けなければならない。つまり、日常生活で遭遇する暴力に対抗する場合に、受け身の技能は直接的には役に立たないように見える。

実際、何人かのレスラーたちも、プロレスで身につけた受け身の技能は、日常生活で遭遇する暴力に対抗するためではなく、自分を不意の事故から守ることに役だったと語っている。桑名は、雪道で転んでも、ちゃんと受け身を取ったので、頭を打たなかったと言う。松原は、「階段から落ちてきたときに受け身を取ったりとかしてるんですよ（笑い）。・・・受け身のおかげで・・・頭も打たなかったし、骨折もしてない」と語る。最も劇的な体験を語ったのは、黒田あやだった。レスラーを引退した一ヶ月後に、原付バイクに乗っていて、後ろから追突されたらしい。20メートルぐらい飛ばされたという。ヘルメットをしていたが、あご紐を縛っていたので、飛ばされた瞬間に取れたらしい。すべて推測の語りになってしまうのは、事故にあった日の朝から黒田が何も覚えていないからである。気が付いたら病院だった。頭蓋底骨折で、普通の人だったら即死だったそうだ。自分は覚えていないが、「プロレスやってたから体が自然に受け身取って、助かった」のではと思う。「首もある程度強いから、こう倒れても、ほんとも条件反射でこう、体を硬くして、まあ、こう、アスファルト叩いたかしらなですけど」、そして「取りあえず首は引いてたんじゃないのかなって」思う。首を引いてお腹の方を見る、後ろ受け身の姿勢をすると、身体が地面に着いたときに、頭を直接打たない。先に地面に着くのは、水平に広げて地面を叩く腕や背中になる。その受け身の姿勢で助かったのではと思っている。このように、身体が不安定な状態になると、無意識のうちに受け身を取っている。

一方で、受け身の習得によって、自分が強くなったと感じているレスラーがいる。山本好江は、自分はプロレスをやっていない女性に比べて「打たれ強い」と思うと語る。「ちょっとくらいぶつかったり、たたかれたりしても、その痛さでめげたりしない」。また、里中亜希は、「痛みとか、体のきつさとかには慣れた気がします」と語る。この二人のレスラーは、実際に受け身の技能を、日常生活の暴力を受ける力として使ったわけではないが、自分の身体的強さになっ

ていると述べている。したがって、「打たれ強さ」が自分の身体的力の自信になり、日常生活で遭遇する暴力に対抗できるという自信につながっていると推察できる。

レスラーたちはプロレスで身につけた攻撃する技能を、直接的に自己防衛に応用することを阻まれていた。しかし、インタビューしたレスラーの多くが、自分に襲いかかってくる相手への恐怖心が少なく、襲われて何の抵抗もできないのではなく、むしろ闘うと自信を持っているのは、彼女たちが、プロレスにおいて、身体接触と破壊的な力を持つ技の掛け受けを経験しているからである。男性と対戦したレスラーは、男性の力の強さを体感している。「力が全然違って（ちがくて）（ママ）、もう、虫みたいにぼんぼん投げられたり」（松原）する。特に、打撃系の技は男性にかなわないと、男性の優位性を認める（葉山）。しかし、自分は身体が男性よりも柔らかいので、関節技をかけられてもそんなに堪えないし（桜井）、男子プロレスラーをうまく丸めこめれば勝ると語っているように（葉山、桜井）、まったく自分を身体的に無力だとは思っていない。男性身体の優位性を部分的にしか受け入れていないので、男性に襲われたときに全くかなわないという意識につながりにくい。さらに、男性から暴力を受けるかも知れないという恐れを抱かないので、葉山や倉田のように、痴漢を撃退したり、謝らせようとしたりする。

8. 結論

受け身ができる人に対してしか技をかけないというプロレスの特殊性により、レスラーにとって、攻撃する技能は一般人に対して使うことが極度に抑制されている。したがって、折角攻撃する技能を習得していても、それを直接的に自己防衛に応用しているレスラーは、葉山理恵、一人だけだった。

一方で、プロレスの経験は女子プロレスラーたちに身体的かつ精神的力と自信を与えている。インタビューしたレスラーの多くが、自分に襲いかかってくる相手への恐怖心が少なく、襲われて何の抵抗もできないのではなく、むしろ闘うと自信を持っているのは、彼女たちが、プロレスにおいて、身体接触と破壊的な力を持つ技の掛け受けを経験しているからである。そして男性身体の優位性を部分的にしか受け入れていないので、男性に襲われたときに全くかなわないという意識につながりにくい。また受け身の技能で培われる「打たれ強さ」が自分の身体的力の自信になり、日常生活で遭遇する暴力に対抗できるという自信に繋がっていると推察できる。この結果から示唆されるのは、一般女性が闘争的スポーツあるいはそれに類似した活動をすれば、自分の身体への自信を深め、ひいては、男性からの暴力に対抗しようとする、身体的かつ精神的な力を得る可能性があるということである。

前述したように、闘争的スポーツは女性には奨励されていないことが、女性から身体的かつ精神的な力を得る貴重な機会を奪っていると推測する。⁷ 女性の闘争的スポーツやそれに類似した活動への参加は、スポーツに隣接する領域の問題としてだけではなく、女性に対する暴力との関係においても、考察が行われるべきであることを本稿は明らかにした。

しかし、たとえ女性たちが、闘争的スポーツあるいはそれに類似した活動に参加しても、それらの経験が暴力への対抗に活用できるという自覚がないと、泉のように格闘技の経験を生かせない。また、市川のように、自己防衛の正当性が認識されていなければ、それらから得られた技能や自信を活用することができない。自己防衛することの正当性が、もっと女性たちに認識され、共有されるべきである。女性に対する暴力における焦点は、暴力の広範さや女性に対する影響に重きがおかれてきた (Hollander, 2002)。その重要性を筆者は否定するものではないが、暴力の犠牲者にならないための自己防衛の重要性がもっと注目されてよい。なぜなら、少なくとも自己防衛訓練は、暴力の犠牲者になることを減らすような影響を女性に与えるということが指摘されているからである (Hollander, 2004)。もちろん、自己防衛訓練のみによって、女性に対する暴力を無くすことはできない。しかし、天下の公道をいつ歩いても良いはずなのに、深夜に歩いていて男性から暴力を受けた女性が非難される日本社会では、男性からの女性に対する暴力がある程度仕方のないこととして容認されている。このような社会では、女性が自分の身体を守りながら生きていくために、自己防衛が依然重要なのだ。

女子プロレスラーたちは、闘う技能の獲得によって、身体化された規範的な女らしさとしての、自らの身体的受動性を変容させているだろうか。McCaughey(1997)の研究対象者の中には、自己防衛を学ぶことと規範的な女らしさの間に対立を感じている女性がいた。しかし、インタビューしたレスラーの中で、暴力に対抗することを女らしさと対立するものとして捉える視点はなかった。日常生活で活用しているレスラーは非常に少数だが、少なくとも多くのレスラーは、女性は男性からの暴力に対抗できないと思い込んでいない。したがって、闘う技能の獲得は、自分の身体に対する自信を醸成させることを通じて、一部のレスラーにおいて、身体的受動性という、自らの身体化された規範的な女らしさを変容させたと解釈できる。

[本研究は、平成15年～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(c)(2)「変容する身体とジェンダー：日本の女子プロレスラーの考察」(研究代表者 合場敬子)により実施した。]

Reference

- 合場敬子.(2007).「変容した身体への自己認識—女子プロレスラーの身体とジェンダー」.『スポーツとジェンダー研究』, 5, 4-17.
- 浅野千恵.(1995).「潜在的商品としての身体と摂食障害」. In 江原由美子 (Ed.),『性の商品化』(pp. 75-109). 東京: 勁草書房.
- 浅野千恵.(1996).『女はなぜやせようとするのか—摂食障害とジェンダー』. 東京: 勁草書房.
- 井谷恵子.(2001).「第7章 学校体育と女性」. In 井谷恵子, 田原淳子 & 來田享子 (Eds.),『目でみる 女性スポーツ白書』(pp. 194-219). 東京: 大修館書店.
- 亀井好恵.(2000).『女子プロレス民俗誌—物語のはじまり』. 東京: 雄山閣出版.
- 神取忍.(1997).『神話(カンフ)』. 東京: 株式会社マガジンハウス.
- 長与千種.(1989).『女子プロレス ここまで喋っていいかしら』. 東京: K Kベストセラーズ.
- 日本レスリング協会.(n.d.).「レスラーのルールを知ろう(基本編)」. Retrieved December 20, 2007, from <http://jwf2007.kir.jp/nyumonn/rule01.html>
- 來田享子.(2004).「近代スポーツの発展とジェンダー」. In 飯田貴子 & 井谷恵子 (Eds.),『スポーツ・ジェンダー学への招待』(pp. 33-41). 東京: 明石書店.
- 桜井厚.(2002).『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』. 東京: せりか書房.
- Bartky, S. (1990). *Femininity and domination: Studies in the phenomenology of oppression*. New York: Routledge.
- Bryson, L. (1987). Sport and the maintenance of masculine hegemony. *Women's Studies International Forum*, 10, 349-360.
- Cline, S., & Spender, D. (1987). *Reflecting men at twice their natural size*. London: Andre Deutsch.
- De Welde, K. (2003). Getting physical: Subverting gender through self-defense. *Journal of Contemporary Ethnography*, 32, 247-278.
- Dubbert, J. L. (1979). *A man's place: Masculinity in transition*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Dunning, E. (1986). Sport as a male preserve: Notes on the social sources of masculine identity and its transformations. *Theory, Culture & Society*, 3, 79-90.
- Dworkin, S. (2003). A woman's place is in the...cardiovascular room?? Gender relations, the body and the gym. In A. Bolin & J. Granskog (Eds.), *Athletic intruders: Ethnographic research on women, culture, and exercise* (pp. 131-158). Albany, NY: State University of New York Press.
- Glazer, B.G., & Strauss, A.L. (1967). *The discovery of grounded theory. Strategies for qualitative research*. New York: Aldine De Gruyter.
- Hartmann, Heidi. (1976). Capitalism, patriarchy, and job segregation by sex. *Signs*, 1, 366-394.
- Heywood, L. (1998). *BodyMakers: A cultural anatomy of women's body building*. New Brunswick, NJ: Rutgers.
- Hollander, J. A. (2002). Resisting Vulnerability: The social reconstruction of gender in interaction. *Social Problems*, 49, 474-496.
- Hollander, J. A. (2004). "I Can Take Care of Myself" The impact of self-defense training on women's lives. *Violence Against Women*, 10, 205-235.

- Kimmel, M. S. (1987). Men's Responses to Feminism at the Turn of the Century. *Gender & Society, 1*, 261-283.
- Lowe, M. (1998). *Women of steel: Female bodybuilders and the struggle for self-definition*. New York: New York University Press.
- Markula, P. (1995). Firm but shapely, fit but sexy, strong but thin: The postmodern aerobicizing female bodies. *Sociology of Sport Journal, 12*, 424-453.
- Martin, K. (1998). Becoming a gendered body: practices of preschools. *American Sociological Review, 63*, 494-511.
- McCaughey, M. (1997). *Real knockouts: The physical feminism of women's self-defense*. New York: New York University Press.
- Messner, M. (1988). Sports and male domination: The female athlete as contested ideological terrain. *Sociology of Sport Journal, 5*, 197-211.
- Messner, M. (1990). When bodies are weapons: Masculinity and violence in sport. *International Review for Sociology of Sport, 25*, 203-220.
- Messner, M. (1992). *Power at play: Sports and the problem of masculinity*. Boston: Beacon Press.
- Reynolds, J. M. (1974). Rape as Social Control. *Catalyst, 8*, 62-67.
- Tolson, A. (1977). *The limits of masculinity*. London: Tavistock Publications Limited.
- Theberge, Nancy. (2003). "NO FEAR COMES" Adolescent girls, ice hockey, and the embodiment of gender. *Youth & Society, 34*, 497-516.
- Young, I. M. (2005). Throwing like a girl: A phenomenology of feminine body comportment, motility, and spatially. In I. M. Young, *Throwing like a girl and other essays in feminist philosophy and social theory* (pp. 27-45). New York: Oxford University Press. (Reprinted from *Human Studies, 3*, 137-56. 1980)

Footnote

- ¹ 日本では自己防衛と類似の言葉に「護身」という言葉があるが、本稿はあえて Self-Defense の訳語である「自己防衛」という用語を使う。理由は、McCaughey (1997) が支持する Self-Defense には身体的に自分を守る術を獲得する以前に、男性の攻撃に対して、恐怖に立ちすくまないで闘う意志を持つための、心理的な訓練を重視しているからである。そして、この心理的な訓練と自分を守る身体的技法を提供するのが自己防衛訓練である。さらに、McCaughey (1997) は、自己防衛ができる人を自己防衛者と呼んでいる。
- ² Dunning(1986) は、サッカー、ラグビー、ホッケーを格闘技 (combat sports) と呼んでいるが、筆者の闘争的スポーツ (combative sports) の定義からはサッカーとホッケーは除外した。理由は、正当なプレーとして相手の身体への攻撃が認められていないからである。また闘争的スポーツには、集団の中で、相手の身体への攻撃がプレーの一部になっているラグビー、アメリカン・フットボール、アイス・ホッケーなどと、最初から一対一で相手の身体への攻撃を行う柔道、アマレス、空手、ボクシングなどが含まれる。
- ³ 女子プロレス界では、頸椎を損傷する選手が少なくない。代表的な例としては、1987年に北

- 斗晶 (引退) が頸椎を骨折し、1990年には山田敏代 (引退) が頸椎ヘルニアになっている。
- ⁴ 筆者は女子プロレスラーの身体と規範的な女性身体の関係を考察するなど (合場, 2007)、多様な視点から女子プロレスラーの身体とジェンダーの関係を考察している。本稿はその研究プロジェクトの一部であるため、必ずしも本稿に関係のない、多様な質問を女子プロレスラーに行った。
- ⁵ 3の質問だけをすると、別に変化したことはないという回答が多かったので、回答を促すために、さらに具体的な例を挙げた質問 (3-1, 3-2, 3-3) をした。
- ⁶ 彼女は、一方で、自分は髪もあまり長くないし、体も結構でかいし、「こんな広い背中した女いな」いので、多分男と思われていると語る。だから、夜道で痴漢に遭うことはまずないとも語っている。しかし、夜道で襲われたら自分が取るであろう行動について、彼女が最も確信を持って語っているのは、自分の身体の一部をぎゅっと捕まえられたらやりかえすという点なので、飛石の語りを、(4) 冷静になれば大丈夫、に分類した。
- ⁷ 一方でプロレスにおいても、攻撃性が暴力の形を取ることがあり、Messner(1990; 1992) が指摘した闘争的スポーツにおける暴力の問題がある。したがって、闘争的スポーツは女性にもっと奨励されるべきだと考えるが、だからといって、そこでの暴力行為を女性は受容すべきではないと、筆者は考える。

**Combat Skills and Self-Defense:
Gender and the Bodies of Pro-Women Wrestlers
Keiko AIBA**

This paper discusses the possibilities of transforming physicalized gender, by focusing on whether pro-women wrestlers change the normative femininity to be physically passive (that is, to have peaceful relations with others, to avoid giving offence, and to passively accept violations upon one's own body). Interviews were conducted with twenty-five pro-women wrestlers, to discover whether they put to practical use the "combat skills" (physical skills used to defend one's own body against the violence inflicted upon it by men) developed through pro-wrestling when faced with violence in their own private lives. While only one pro-wrestler actually used her combat skills for self-defense, many of the others claimed that they at least had some confidence in countering violence. In any case, many of the pro-wrestlers believed that it was not impossible for women to counter male violence. Therefore, it can be argued that for a number of pro-women wrestlers, the acquisition of combat skills has effectively developed their physical confidence and thus transformed the normative femininity for them to be physically passive.

Keywords: gender, body, women's pro-wrestling, self-defense, physically passive